

幼いころ、父や母はよくわたしに「お話」を聞かせてくれた。
そこにはいつも、牛や豚や鶏や小鳥が登場した。
そんな動物たちの物語を、今度はわたしが語り部となって
語り継ぐことができばうれしい。

カイツ・ネスト・ファーム農場主 ロザムンド・ヤング

The Secret Life of Cows
by
Rosamund Young

All rights reserved
Copyright © Rosamund Young, 2003, 2017
Illustration copyright © Anna Koska
Published by arrangement with Faber and Faber Limited
through Japan UNI Agency Inc.

Translated by Hiromi Ishizaki
Cover illustration by agoera
Designed by Atsushi Sato
First published 2018 in Japan by Adachi Press Limited

著者からのひとこと

この本を作るにあたって、章があつたほうがいいのではないかという意見もあつた。けれど、ここで語られるエピソードのひとつひとつは、互いに関連しあつてひとつの物語を紡いでいる。だから、章は必要ないし、むしろないほうがいいと判断した。かわりに、それぞれのエピソードにつけた小見出しが、ガイド役を果たしてくれると思う。

なお、本書の初版は二〇〇三年に出版された。今回、再版の機会を得て、現在の農場の状況をより反映するように、一部に加筆と改訂を行なっている。

目次

アラン・ベネットによる序文	12
はじめに	14
牛たちの知られざる生活	36
必要は発明の母	37
アリスとジム	38
母と娘	42
ジェイク	48
人間もときには役に立つ	54
肉親を亡くしたとき——バンブル一族の話	56
眠りについて	61
鳴き声が物語ること	65
牛はよい判断をする	69
牛にうわべのつき合いはない	77

一筋縄ではいかない雄牛たち	81
ファット・ハット二世	86
牛にも好みがある	97
目は口ほどにもものを言う	99
牛の記憶力	101
馬について	102
羊、豚、鶏について	103
難しい出産のときも、牛は正しい判断をする	112
デイジー一族の話	114
農場では日々事件が起こる	117
体を使ったコミュニケーション	120
グルーミングについて	122
ミルクにも個性がある	124
子牛は遊びを考案する	125
忘れがたきアメリカ	128
鶏は遊び好き	131
鶏の新たな一面	133
ふたたびアメリカの話	139
野鳥の話	142
自己治癒力について	144
リトル・ドロシーの話	151
牛について知っておくべき20のこと	158
鶏について知っておくべき20のこと	160
羊について知っておくべき20のこと	162
豚について知っておくべき20のこと	164
カイツ・ネスト・ファームについて	166
参考資料	170
訳者あとがき	172

ファット・ハット

元の名前はハリエット。
女性より男性が好き

ロニー
(×9)

ボネット
大のリンゴ好き

ブルー・デヴィル
わがままで自己中心的

ストロー・ベレー

ファット・ハット二世
慎重派で根に持つタイプ

ローン・ボネット
お人好しではない

リトル・ボネット

ピーター・ボネットィ

ゴールド・ボネット

ヨーク公
猫のように
ピチャピチャ
水を飲む

ブラック・ハット一世

ブラック・ハット二世

ジェーン・エア
生まれてすぐ
孤児になる

ジュライ・ボネット
毛づくろいして
もらうのが大好き

クリスマス・ボネット

スマッシャー

レッド・ハット

ミスター・ブラック・ハット

ミスター・ブラック・ハット二世

レッド・アデア

ドナルド

ダラム司教
心やさしい賢明な聖職者、
デイヴィッド・ジェンキンスに
ちなんで

ウォリック伯爵

ランカスター公

レッド・ラム

ベイビー・ジェーン

ロチェスター

ポベット

ロチェスター二世

「自然は動物たちに誰が友であるかを教えてくれる」

シエイクスピア『コリオレイナス』第二幕第一場

「人々は、象の生活をとりあげたテレビ番組を見て驚く——集団での子育て、家族愛、仲間との助け合い、遊び心。だが、自分たちの国で飼われている牛も、環境さえ許せば同じような生活を営むことには気づきもしない」

ジョアン・バワー

（家畜動物の権利を守る会「ファーム・アンド・フード・ソサエティ」の創始者）

『牛たちの知られざる生活』というタイトルをはじめて目にしたときは、何かの冗談かと思った。だが、冗談どころか、これはまぎれもなく牛について書かれた本だ。とても楽しい本だが、牛が（そして羊や鶏も）一般に考えられているよりはるかに知恵のある聡明な生き物だと知らされると、多くの牛たちが置かれている境遇を考えて、ちよつとも悲しい気分にもなる。これはそういう本だ。これまでの物の見方をがらりと変えてくれる。

これを書いたのが、ただの頭でつかちの動物愛護主義者なら、話半分に聞き流すこともできただろう。だが、ロザムンド・ヤングという女性は、『有機農法』^{オーガニック}という概念がまだなかったころから、イギリスのウスターシャー州で自然な環境で動物を飼育するオーガニック・ファームを営んでいる。この農場で働く人たちは、牛乳を飲めばどの牛から搾られたものかわかるという。工場式の農場経営^{ファクトリー・ファーム}について、著者はわたしがこれまで読んだどんな文章よりもシンプルで説得力のある反論を唱え、その主張は地に足の着いた日々の経験に支えられている。

ところで、読んでいて不思議に思うのが、牛たちの暮らしぶりや、性格や考え方の違いについてはこと細かに描写されているのに、牛たちがどんなときに恋に落ちるのか、異性へのアプローチにも個性があるのかについてはどこにも書かれていないことだ。牛も引つ込み思案だったり、積極的だったりするのだろうか？ その点にあえて触れないのは、著者が牛たちに対して敬意を抱いているからかもしれない。牛たちも、飼い主と同じようにプライバシーが尊重されるべきだと感じているのだろう。

それはさておき、この本はまさに目からうろこの一冊である。物言わぬ動物たちが、何も言わないからといって何も考えていないわけではないことを教えてくれる。いまでは、車で牧場のそばを通りすぎるとき、牛たちがどんな友情をはぐくみ、どんなことに思いを巡らせているのだろうとふと考えてしまう。この本を読む前の自分なら、そんなことを考えるのはばかばかしいと笑い飛ばしていただろう。いまはそうではない。

はじめに

牛たちが遊んだり、体を舐めあつたり、小競り合いをする様子を目にするとき、それがきょうだいなのかいとこ同士なのか、友達なのか仲が悪いのかを知れば、知らなかつたときとはすっかり違う光景が立ち上がってくる。また、牛たちの関係性がわかれば、オスの子牛は弟の面倒をよく見ることや、姉妹は常に一緒にいるか避けあうかのどちらかだということ、さらに牛の家族にはひとところに集まって寝る家族と、そうでない家族があるといつたことが見えてくる。

牛は人間と同じくらい個性に富んでいる。利口な牛もいれば、鈍い牛もいる。人なつこかつたり、慎重だつたり、けんか早かつたり、おとなしかつたり、独創的だつたり、ぼうつとしていたり、プライドが高かつたり、恥ずかしがり屋だつたりする。ある程度の規模の農場なら、いまあげたような性格の牛はだいたい揃っているはずだ。わたしたちの牧場では長年にわたつて、そんな動物たちの個性を尊重し、それぞれを「個人」として扱うことを理念に掲げてきた。

わたしの両親が農場経営をはじめたのは、一九五三年のことだ。わたしは生後一二日、

兄のリチャードはもうすぐ三歳になろうとしていた。はじめは乳牛五頭と中古のトラクター一台からのスタートで、電気も電話もなかった。

やがて、エアーシア種の乳牛を少しづつ買い足し、ウエセックス・サドルバック種の豚も飼うようになる。野ウサギの多い土地は、作物を育てるのには向いていなかった。

当時、国の補助金は、設備の増強に対して交付されていた。政府は、最新の機器を導入するよう圧力をかけた。両親は、自然な環境で動物を育てたいという考えをもっていたが、有機農法という言葉すら知らず、国の方針と違う道を進むにはそれなりの時間がかかった。ただ、ふたりともはじめから心に決めていたのは、動物に敬意をもつて接し、快適な環境で育てようということだった。

幼いころ、父や母はよくわたしに「お話」を聞かせてくれた。そこにはいつも、牛や豚や鶏や小鳥が登場した。そんな動物たちの物語を、今度はわたしが語り部となって語り継ぐことができればうれしい。

牛は一頭一頭に個性がある。同じように羊や豚や鶏や、さらに言えばこの地球上に生きるすべてのものは、どんなにちっぽけでつまらないと思われているものにもそれぞれ違いがある。猫や犬に個性があることに異議を唱える人はあまりいないだろう。わたしたちの農場でも、病気や事故にあつたり親を亡くしたりした動物を、ペットのように手元に置き

て世話をすることがある。すると、その動物にはすばらしい知性と愛情と適応能力が備わっていることに気づかされる。つまりは、どんな動物であれ、相手のことを知るにはそれなりの時間をともに過ごす必要があるということだろう。相手が人間でも同じことだ。

ペットを飼っている人なら誰でも、その性格をよくわかっていて、この子にはこんなところがあつてね、などと人に話して聞かせたりするだろう。一方、家畜の場合はたいいてい大きな群れで飼われている。でもだからといって個性が消えてしまうわけではない。牛の知的レベルは、人間と同じくらいピンからキリまでさまざまだ。

教室にいる生徒たちが、みんな同じであることを望む教師はいない。全員が同じ服を着て、同じ趣味をもつような社会を作りたい人もいないだろう。それなのに、クモやチョウやスズメや牛の違いを見分けられないことを理由に、どれもみな同じだと決めつけるのはおかしい。

狭い場所に閉じこめられて画一的に管理され、何の変化もない不自然な環境で生きることを強いられば、動物であれ人間であれ、覇気がなくなり、個性が消えてしまったように見えるかもしれない。それを見て、やっぱりみんな同じだとか、そんな境遇に満足していると考えるのは間違っている。

多くの人が、人間をものさしにして動物の知性を計ろうとする。だが、そもそもなぜ人

間の尺度をほかの生き物に当てはめなければいけないのか。どんな動物も、人間と同じくらいさまざまな感情を抱くが、表現のしかたが違うのだと考えるのが筋だろう。牛が牛として生きるのにじゅうぶんな知恵があるとすれば、それ以上何を求めることがあるだろう。干し草を食べるときに、体の大きな強い牛に何度も押しつけられた子牛が、母親のあごの下にもぐり込めば安心して食べられることを学習したとする。わたしには、それこそが生きた知恵だと思える。ボタンを鼻で押すとゲートが開くことを子牛に教えこんで、いたい何になるというのか。何にもならない。

わたしは生まれたときから毎日牛を見てきた。牛は驚くほど論理的で実践的な知性を見せることもあれば、どうしようもなく愚かなふるまいを見せることもある。それは人間でも同じだ。牛は、ただ日々の生活を営み、そこで起こる問題にうまく対処したり、できなかったりしているだけだ。重要なのは、彼らに必要なのは生きていくための知恵であつて、人間の中途半端なしもべになるための知性ではないということだ。

自然農法の専門誌『スター・アノド・ファロウ』に、牛の自由な行動を制限すると、数世代後には脳の大きさが三〇パーセント減少するという記事が掲載されたことがある。興味深いことに、これはわたしたち家族が観察したことに合致している。一九七〇年代、両親は、自分たちの飼っている牛の額の幅がしだいに広くなり、顔つきや行動が以前よりも

牛たちの知られざる生活

わたしたち家族は、農場の牛たちのことをずっと誇りに思ってきた。乳を搾り、名前で呼びかけ、体をなでてやり、その個性をおおむね楽しんできた。けれども、牛たちが互いに愛情を感じていることにはじめて気づかされたのは、わたしが一四歳の夏のことだった。

一九六八年当時、農場ではエアースシア種の乳牛を飼って酪農を営んでいた。その年の夏、両親は六キロほど離れた丘陵地帯にある牧草地を三か所借り、レンタルした大型の貨物トラックで、まだ若い雌牛と乳の出ない時期の雌牛を夏の放牧に連れていった。牛たちはそこで、青々と茂った草をたつぷり食べ、氷のように冷たい湧き水を飲んで、三か月のパカンスを楽しんだ。農場で留守番をする牛たちも、ふだんと変わらず機嫌よく過ごしていた。牧草地の返却期限が近づくと、両親はまたトラックを借りて、約束の日には休暇を楽しんだ牛たちを連れて帰った。

牛たちが戻ってから数日というものの、離れ離れになっていた母牛のサンビーム（日の光）と娘のムーンビーム（月の光）は、母屋の庭や牧草地で肩を寄せあつて過ごした。ただ一

緒にいるだけだったが、わたしたち家族には、彼女たちが再会を喜び、離れていた三か月のことを報告しあつているように見えた。

二頭は、離されたときにはとくに寂しがる様子はなかった。当時、乳牛は自分の乳で子牛を育てておらず、サンビームとムーンビームが互いのことを覚えていたかさえ定かではなかったが、母娘のあいだに相手を思う気持ちがあるのは明らかだった。この出来事によつて、わたしたち家族は、牛にも愛情があることに目を見開かされたのだ。

必要は発明の母

エアースシア種の牛のウィツジーは、二度目の出産で生まれた子牛（ずんぐりした脚の短い、茶色つばいページュのメス）に「あなたはとびきりのお利口さんね」と声をかけた。メグと名づけられた子牛は、素直にそれを信じた。

やがて冬が訪れ、毎日のように地面がぬかるむようになる、メグはマホガニー色の脚を汚すのはぜつたいにいやだと行動で示してみせた。ある凍てつく寒い朝、わたしたちは、メグが牛舎の二階にある穀物庫から出てきて、あくびをしながらあたりを見回しているところに出くわした。ここまで上がってきた甲斐があつたと満足しているような、どうやっ

て下りようかと思案しているような様子だった。どうやらメグは、狭くて急な一二段の石の階段を上りきり、ぬかるみとすきま風といじめっ子から逃^{のが}れて、穀物庫の快適な木の床の上でひと晩を過ごしたらしい。それまで、穀物庫の扉はずつと開けっ放しにしてあった。牛が階段を上ることなど考えもしなかったからだ。

それからしばらくして、メグは二頭の友達にも階段の上り方を教え、わたしたちは彼女たちのために二階にも干し草と水を置くようになった。

アリスとジム

わたしたちは、牛の乳を搾って出荷するのを一九七四年にやめた。それ以来、農場の牛たちは、自分の乳で子牛を育てるようになった。とはいえ、わたしたち家族が飲むミルクを搾る牛も一頭か二頭は常に確保していた。

一九九〇年に家族専属の乳牛になったのがアリスだ。毎日母屋に連れてきて乳を搾るうちに、わたしたちは、アリスがすばらしく利口でやさしく素直なだけでなく、いたずら好きでお茶目なところがあると気づくようになった。

アリスは、知的な広い額と大きな黒い目をした大柄な黒い牛で、乳搾りの日課をすぐに覚えた。ミルクは家族が飲む分だけあればよく、乳を搾るのは一日に一度だけだった。毎日夕方になると、家族の誰かがアリスともう一頭の牛を連れて帰る。二頭とも、だいたいいつもお気に入りのL字型の牧草地にいた。ここは農場のなかでもとびきり眺めのよい場所で、起伏のない草原がはるか先までずつと続いているのだが、牛たちに人気があるのが眺めのせいかどうかはわからない。母屋から、くるみが原ウオナルナツツ、ツリー・ワールド（樹齢二二〇年のクルミの木が五本立っている）を抜けて丘を上りきつた先に広がっているのがL字型の牧草地だ。たいいてい、アリスたちはずつと遠くのほうにいた。だが、わたしたちが来た理由を察して、いつも素直にこちらに向かつて歩いてきた。

母屋に帰る途中、アリスはときどきいたずら心を発揮した。わたしの横をぶらぶら歩いていたかと思うと、とつぜんスピードを上げて、跳びはねながら見えないところに行ってしまうことがあった。そのままもう一頭の牛とのんびり歩いていると、数百メートル先でアリスがクルミの木のうしろに立っている。かくれんぼをしているつもりらしいが、大きすぎて隠れられるはずもなく、わたしに見つかったことに気づくと、すぐまた次の木のうしろにさつと隠れ、そうこうしているうちに母屋の庭に着くのだった。

アリスは、我が家のミルク当番を一年務めたあと、三か月のあいだ仲間たちと牧草地で過ごし、ふたたび出産の日を迎えることになった。予定日が近づくと、手助けが必要に